

## 卒業して半世紀 いま思うこと

—仕事と歌 二刀流の人生を生きて—

土 屋 由里子\*

皆さんこんにちは、土屋と申します。私は主に卒業してから、仕事と歌という二刀流の人生を生きてきましたという体験談をお話させていただきたいと思います。

### お茶大での4年間 心に残ること

お茶大には1968年4月に入学しました。高校までは男女共学で血気盛んな高校時代を過ごしたんですけども、それから一転して女子大の真面目でおとなしい同質性というものに当初戸惑いも感じました。

日本史を専攻しまして、古文書を読むのが面白かったという記憶があります。一方で、合唱サークルに傾倒しました。私は子供の頃から歌うことが大好きで、お茶大では教育大と合同の合唱サークル、ハトの会という、ブルガリアの合唱など民族音楽に取り組む異色のサークルだったんですけども、そこに入部いたしました。学生生活の軸足はそちらにあったかと思います。

また、この時代は学生運動の最盛期で、若者が社会や政治に問題意識を持って行動する時代で、反戦や学生自治を求める学生運動が激化しておりました。お茶大も無関係ではなく、学生部長室を封鎖したために<sup>1</sup>、お茶の水女子大学が学生運動の重症紛争校<sup>2</sup>の一つにも数えられたということがございました。

### 大手電機メーカーに就職

1972年に卒業した時、私は教職より実業に興味がありました。ところが当時、四大卒の文系女子の就職先はごく限られておりまして、リクルートのような会社もネットもなく、情報をまったく得られませんでした。

結局、父親のコネで大手電機メーカーに就職することになりました。それで銭湯ではないですけど、入り口から完全に男女別となっていました。入社時は短大卒2年経過という扱いでした。同期で四大卒の文系女性が40人ほどいたのですが、一年間でほとんどが退社してしまいました。

### 女性がクリスマスケーキだった時代

女性がクリスマスケーキだった時代ということなんです。繰り返しになりますけど、会社は男女差別が当たり前で、資格制度が二系統に分かれて、男性が主務、女性が執務で女性の仕事は男性の補助に限られていました。書類に男性回覧という付箋がありまして、仰天したものです。同期に東大卒の男性がいたんですが、最初の研修から雲泥の差でした。

当時の世間では女性は25歳までに結婚して専業主婦になるというのが通常コースで、寿退社で祝い金が出るほどでした。12月25日を過ぎると売れ残りで価値がなくなるクリスマスケーキに例えられたものです。

花の丸ノ内OLと呼ばれていました。女性の会

\*1972年 お茶の水女子大学文教育学部史学科卒業

社勤めはエリート男性社員をゲットするためでもあったわけです。

## ソフトな闘志で壁を切り拓いた

その中で私としては一つは会社の人事制度を利用して、資格アップへの挑戦を行ないました。猛勉強しまして、試験を受けて男性と同じ主務系統に転換、しかし、資格が変わっても成績評価は低いままでした。

幸いにして、私は宣伝部に所属していましたので、お堅い会社の中では自由で楽しさ優先の空気が救いでもありました。そういった中で周りの人と調和しながら、仕事で一つ一つ自分の価値を活かす努力をしてまいりました。具体的には、例えば社内向けの広報や、企業PRの会社案内や映像作成の企画制作を担当し、海外拠点の撮影で男性クルーを引き連れて世界一周したこともありました。また、海外アーティストを招聘した音楽イベントも担当しました。これらは自分の特性に合っていたので、目に見える成果を上げることができました。例えば、外部のコンクールで受賞したり、部長表彰なども得ることができました。

当時、男性上司からもこれは具体的に言われたんですけど、お茶大卒で「女の東大」なのに、なんでこんな仕事させているんだみたいなことを言

われたことがあるんです。やはり上司の人たちもなみの女性扱いではまずいと一目置いていたのではないかなと思います。

## 男女雇用機会均等法

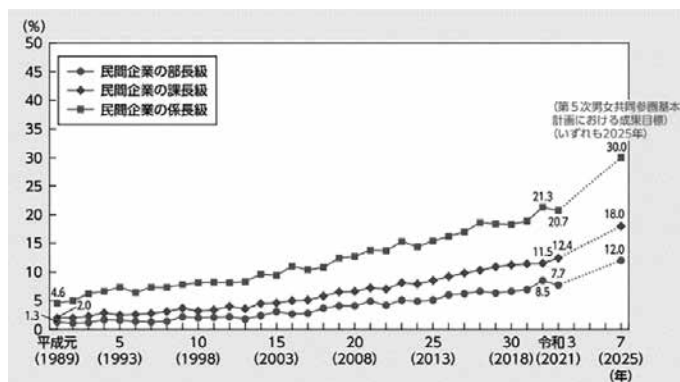
男女雇用機会均等法が1985年に制定されました。制定前夜には労働組合の本社支部婦人部長として啓蒙活動もしました。この均等法成立の意義は大きかったと思います。私自身も試験を受けて係長級に進んだり、その後の挑戦で課長級の資格を得ることができました。

そして本社から静岡の製作所、工場に転勤しました。これは女性では大変異例な出来事でもありました。2002年には本社宣伝部に復帰しまして、企業イメージアップやWebマーケティングを担当いたしました。2009年、60歳の定年を迎えまして、ここですっぱりと退職いたしました。

最近ですが、宣伝部の後輩女性で課長が2人もいるということを知りまして、感慨深かったです。彼女たちにも私の細い背中を見せてこられたのかもしれないと思ったものです。

## まだまだ少ない女性の役職者

内閣府の統計をみただけですけども、民間企業の



出典：内閣府『男女共同参画白書』令和4年版 全体版（PDF版）P.121  
[https://www.gender.go.jp/about\\_danjo/whitepaper/r04/zentai/pdf/r04\\_genjo.pdf](https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r04/zentai/pdf/r04_genjo.pdf)

女性の役職者のグラフ数ですね。私は退職したあたりは、この辺で大変低いですけど、右肩上がりといえど、2021年の部長が7.7%、係長でも20.7%で日本は大変ジェンダーギャップが大きいと言われてますが、まだこういう現状かなと思います。

## 会社生活と私を支えた歌

会社生活を振り返りまして、大企業で37年間、苦楽もありましたけれども、仕事は生きがいでした。それから給与水準から、私は今も独身なんですけれども、生涯を生活できる基盤を得ることができたと思います。また、企業での業務経験は今も役立っています。

それから、私はちょっと変わりものなんですけれども、仕事だけではなくて歌の方で、二刀流の生活をずっと続けてきました。会社勤めしながらも、学生サークルから始まりのちに芸能山城組となったアマチュアグループで活動をし続けて、半世紀以上経っています。

この両立の負荷はあったんですけども、仕事一筋ではなく多面的な価値観とか精神的なゆとりが持てたということは支えになったかと思います。

そこで定年後は残りの人生は自分の心が欲することを自由にやって行きたい、ありあまる時間をそこに注ぎたいと思いました。ちなみに芸能山城組のホームページは私が作成しておりまして<sup>3</sup>、「ケチャまつり」とかコンサートをやってたりしています。

## いまの暮らし お茶大への思い

今、振り返りまして、74歳になるのですけれども、仲間と共に暮らしています。人間にとってビタミンと同じ必須栄養素として、音楽もあると思います。それを享受できていて、幸せだと思います。芸能山城組の本部があり、多くの仲間が住む東中野に居住しています。この中心的なメン

バーは、お茶大の卒業生が多くて、彼女達との長年の絆は絶えることがありません。具体的な日常的な支え合いの例として、私の場合は一人暮らしなので不安もあります。そこで、自宅のスペアキーを信頼できる女性の仲間に預けたりもしています。

最後に私の人生を変えたお茶大の意義の一つは、厳しい男女差別の会社生活で、お茶大卒の肩書きブランドがなければ、実力や努力だけでは乗り越えられなかったかもしれない。また、お茶大に入学しなければ出発点となった合唱サークルとの出会いもなく私の人生はまったく違っていただろうと思います。私は、この通り、何か一つ一つ自分で考えてこうかなって思うところをずっと歩んできて、あまり前に道はないようなところを、歩いてきたんですけども、なにかのご参考になればと思ってささやかに体験談を話させていただきました。

ご清聴ありがとうございました。

## 注

- 1 1968（昭和43）年12月末頃にお茶の水女子大学では社会主義学生同盟（社学同）M・L派や革マル派に属する学生が中心となり「全学闘争委員会」（全学闘）が結成された。この全学闘に所属する学生たち20、30名が学生準則の撤廃などを求め、1969（昭和44）年2月1日に学生部長室において「団交」を要求、交渉に当たった学生部長が疲労のため入院した後も、学生部長との「団交」未了を理由として交代で泊まり込み、学生部長室の占拠を継続した。学生部長室の占拠は12月4日に学生部長や事務職員が、占拠学生の不在時に占拠を解除するまで続いた。（『お茶の水女子大学百年史』刊行委員会編『お茶の水女子大学百年史』、『お茶の水女子大学百年史』刊行委員会、1984年5月、435～436頁）
- 2 当時学園紛争が長期化しかつ解決の見込みが立っておらず、これ以上紛争が長引いた場合、「大学の運営に関する臨時措置法」の適用により、閉校または廃校になる危険性がある大学のことを「重症校」と呼称していた（法学書院編集部編『時事用語解説 1971年版』法学書院、1970年、289頁）。1969年10月28日に文部省から臨時大学問題審議会に提出された紛争大学一覧では、お茶の水女子大学が重症校8校のうちの1校とされた（「重症校は8校 文部省が報告」、『毎日新聞』、1969年10月29日、朝刊、1頁）。
- 3 芸能山城組 <https://www.yamashirogumi.jp/>（2024年1月13日閲覧）。